

この企画は、日本造園学会の創立 100 周年及び GREEN×EXPO 2027 を契機として、気候変動と多発する自然災害、食料・エネルギー危機、感染症の蔓延などの世界的な課題に加え、本格的な人口減少及び超高齢化社会を迎えつつあるなど、時代が大きく変動する中で、「ランドスケープアーキテクトは明日の都市に貢献できるか」をテーマにこれからの都市のあり様について対談を行っていく、日本造園学会と都市緑化機構の共同企画です。

今回は、第 1 回として、浅野房世さん（園芸療法学会理事長）、白波瀬佐和子さん（東京大学特任教授）をお招きし、聞き手として秋田典子さん（千葉大学大学院教授、日本造園学会理事）、横張真さん（東京大学特任教授、都市緑化機構理事長）にご参加いただき、「ダイバシティ&インクルージョン」をテーマに対談していただきました。



（右手前から、浅野房世さん、白波瀬佐和子さん。後方右から、横張真さん、秋田典子さん）

お互いがリスペクトし、説明責任を果たす社会

横張真（以下、横張）：この対談シリーズは、様々な分野でご活躍の方々をお招きし、我々ランドスケープ分野の方との対談を通じ、ランドスケープ分野の将来に向けたヒントを得たいという意図で企画したものです。今回は、都市社会の多様性や包摂性をテーマに、ランドスケープ分野から浅野房世先生、そして社会学がご専門の白波瀬佐和子先生にご参加い

ただきました。

まずは、お二人から自己紹介を兼ねて、これまでに取り組んでこられたこと等をご紹介いただけますでしょうか？

浅野房世（以下、浅野）：私は、2020年の春まで東京農業大学で園芸療法学の教鞭を取っていました。現在は団体をつくり、園芸療法の臨床に取り組む人を支援しています。

私がこの分野に取り組むこととなったきっかけは、1990年に大阪で開催された花の万博でした。賑やかな会場で、車椅子の高齢者がちっとも面白くなさそうにしているのを見て、お金をかけて整備したのに、弱者が楽しめていないのではないかとすることに気づき、弱者のための公園づくりはどうなっているのだろうと思って調べたところ、日本はもちろん、アメリカやイギリスでも、まだまだこれからということが分かり、自分でやらなければならないと思ったのです。ちょうどアメリカでは、ADA法（Americans with Disabilities Act of 1990）が制定されたところで、1995年までに障害を持つ人が社会参加できるようにしようという取り組みが進み、公園でもアクセシブルな整備が進みました。

私は、緑の中のダイバーシティについて、2点課題があると考えています。

まず、元々ユニバーサルデザインはプロダクトデザインなので、そのまま緑にも適用しようとすると、自然を壊してしまうことになりかねないという点です。国土交通省の都市公園等移動円滑化ガイドラインの策定にも関わりましたが、自然公園を所管する林野庁や環境省も含めて、自然を壊さずにできるところまでは整備して、段差や傾斜、距離などの情報を公開することで、多様な人が自分の責任で選択して、公園を利用するべきだ、という風潮ができてきたので一安心しています。

もう1つは、ユニバーサルデザインを実現するためにはコストがかかりますが、お金をかけて公園を作っても、ソフトがなければ高齢者や障害者は遊びに来ないという点です。たとえば、車椅子の方でも使える、立ち上げ花壇を作ると、子どもも使いやすいし、高齢者も腰をかがめなくていいし、全盲の人も香りをかぎやすくなるし、といいことがいっぱいありますが、そもそも利用者が来なければ使われない。ハードとソフトが両輪として必要なのだということに気がつき、まずはボランティア育成に力を注いできました。

さらに、1995年に発生した阪神淡路大震災の後、自死を選ぶ人がすごく多かったのですが、仮設の排水溝のようなところでお米を育てるといふやさやかな行為でも、たくさんの高齢者が生きる気力を取り戻してくれたという経験から、園芸療法というものの可能性と、それを実践できる園芸療法士というソフトの必要性を認識しました。当時の兵庫県知事に、花と緑の癒しを科学して世界に発信することが大事なのではないでしょうか、という話をしたら、2002年に淡路景観園芸学校の中に日本で初めての園芸療法の学校ができ、その後、東

京農業大学にも講座ができて、そちらに移ったという経緯です。



車いすでも使いやすい、立ち上げ花壇(レイズドベッド)で落花生を収穫
(写真提供:浅野房世さん)

白波瀬佐和子（以下、白波瀬）：私の専門は社会学です。最終的に目指すところは人々の幸せであって、社会に貢献することを目標に研究に取り組んできました。

研究者として、分かりやすく伝えること、抽象論を抽象論で終わらせないことが重要だと考えています。日本を飛び出してイギリスでお世話になった恩師からも、具体的なことと抽象論が連動し、理論を実証できてこそ初めて意味がある、という教えを受けました。さらに、実証の中で課題をあぶり出し、この課題を解決するために、どのような政策を展開していく必要があるのかを明らかにしたいと考えています。

社会学には批判学問としての位置づけがあり、問題の所在に着目します。その視点からまちづくりについて考えると、かつての高度経済成長期のような、人口の大多数が15歳から64歳で、かつ概ね健康で、という、非常に平均的で分散が少ない社会という単純なモデルを想定したままでいいのか、という問題が浮かび上がってきます。健康な男性だけでは社会は成り立ちません。歩けない子どもも大人もいるし、聞こえない人、見えない人もいます。何より高齢化社会が進めば、同じ年齢でも身体能力、認知能力などは千差万別になります。

都市の公園や道路などのハードと、利用者というソフトがきちんとリンクしないと、どちらも機能不全に陥ることになってしまうのではないのでしょうか。つまり、今までのような、

画一的な制度設計ではダメだということです。ただし、分散が広がり、またそれぞれの選択を考慮すればするほど、浅野先生のご指摘の通り、コストもかかります。

残念ながらこれが現実であり、その対応は必然です。これまで、日本では、このコストをきちんと払おうとしてこなかったのではないのでしょうか。その理由は、既得権益や決定権を持っていた人たちがこういう社会課題があり、対応しなければならないということに、気づき、注意を注いでこなかったからだと思います。ダイバーシティというのは、結局少数派の話であり、その少数派の話を多数派に向けて、多数派にとってもメリットがあるように説明するということが、まさしく今、必要なのだと思います。

払わなければならないコストはどんどん大きくなっていきますが、持続可能で包摂的な社会の実現のためにはやらなければならない、というのが私の課題認識です。

秋田典子（以下、秋田）：私も、東日本大震災の復興に取り組んできましたし、学問は幸せな社会を作るためにあるものだと思いますので、お二人のお話に非常に共感しました。現在は、大学でダイバーシティ担当副学部長として、障がいのある学生のサポートなどに取り組んでいるのですが、この経験から、ダイバーシティは社会の伸びしろだと感じています。

白波瀬：アメリカやヨーロッパのような、民族的な多様性に富んだ国々では、根深い課題がありつつも、ダイバーシティに関する取り組みが行われ、日進月歩で進化していて、それがパワーにもなっていますね。日本も全く無関係ではないはずなのですが、ダイバーシティが伸びしろだという合意形成が、まだできていないと思います。

横張：日本は、民族的・宗教的に多様性が少ないという背景もあり、あまり白黒をつけずに、「まあまあ」でなんとなく治める文化、社会のありようが1つの特性となっていると言えるのではないのでしょうか。

以前、カナダのトロントに住んでいたことがあります。トロントは世界で最も多くの民族が暮らす都市のひとつと言われながら、様々な民族がお互いにある程度の距離を保ちつつ、喧嘩せずに同居していると感じました。その理由として、カナダ人はとても分かりやすい英語を話しますし、社会のシステムも非常に単純にできていて、移民がすぐに溶け込めるような基盤があり、その結果、適度な距離を保ちつつ、多様な民族が同居するまちが実現しているのではないかと思います。「まあまあ」では治められない社会の知恵を実感しました。



Photo by 横張真

LGBT の街として有名なトロントのチャーチ通り

LGBT の人々が集い、毎年 6 月末には「Pride」と称されるパレードも開催される、カナダ・トロント市のチャーチ通り。LGBT を象徴する虹色の看板や旗などが街中にあふれているが、道行く人々には、とくに変わった様子もない。日常のなかにさりげなく多様性が受け止められている様子が心地よい。

浅野：「まあまあ」で治める文化は、その社会を構成している人たちが、みんなある程度同じ知識を持ち、同じような考えである必要があるのではないのでしょうか。

白波瀬：みんなある程度同じ考えでいるという前提がある、つまり共通認識がある社会は、良くも悪くもそこで物事が決まり、時間短縮がなされる面もありますが、多様な人がその社会に入ってくると、必然的に言葉で表現し、説明し、合意形成するというステップを踏むことが必要になりますし、それに慣れていかなければならないと思います。

また、多様な人がお互いに敬意を払うというのは非常に重要だと思います。

説明責任を果たし、お互いを尊重して、多様な人が共生する社会をつくるために、どのように制度などを整えていくのが非常に重要で、世界中で同一のモデルを適用できる時代でもないので、各国がそれぞれ検討し対応しながら次に進んでいく必要があるのだと思います。

横張：言葉で表現し、わかりやすく説明することの必要性について、私はよく、民謡をたとえ話に用います。

本来、民謡には楽譜がなく、謡い手の微妙な節回しなどはインパーソンで受け継がれていくものですよね。この方法だと、すばらしい民謡だったとしても、広く社会には行き渡らないし、謡い手がいなくなったらそれきりで終わってしまう。けれども五線譜に載せれば、地球の裏側にだって届けることができる。ただし、五線譜に載せるためには、いわゆるオタマジャクシでは表現できないような微妙な節回しはあきらめなければならない。つまり、表現の一部を捨てても五線譜に載せることができれば、世界中の人が謡い演奏することができるようになり、さらに、感銘を受けた人のなかに、謡い手から直接学ぶためにやってきて、その民謡の継承者になってくれる人があらわれるかもしれない。このように、あえてディテールに目をつぶっても、あえてユニバーサルな表現にのせる道筋を作ることが、日本文化にとっては大切なのではないのでしょうか。

白波瀬：そうですね。積極的に五線譜に載せるという取り組みをしなければならないと思います。海外移民が増えると日本文化が消えてなくなってしまうと心配する人もいますが、どんなに変化しても日本的なものは残ると思います。

帰国して、飛行機から降りた瞬間に、空気の色や、音や、緑が違うことを実感します。そういう異なる環境の中では、当然、美しさや、生活のあり様なども異なりますよね。

横張：そうですね。その土地を読み解き、その土地に合ったものをつくる英知が問われますね。

第3の居場所の必要性

浅野：私は、学校に行けなくなった子どもたちとか、職場に行けなくなった働き手とかの臨床を手掛けることが多いのですが、家や学校や職場と異なる、安心できる、危害を加えられない居場所、第3の居場所がすごく必要であると実感しています。そしてそれを具現化するために花と緑が非常に重要だと考えています。

フィールドノートをつけていると、対象者の中で変化が生じた転換点がたくさんあることに気が付きます。例えば、長い間、芽が出なかったものが突然パンと芽が出たとか、あるいは結実したものを食べたら美味しかったとか。人と植物が一緒にいることで変化が起きるドラマを、1つずつ大切にしなければならないと感じています。

もう1点、高齢化社会が進んでいく中で、これから5人に1人が認知症になる時代が来ると言われていますが、認知症の方に畑作業をしてもらうと、ウェルビーイングが高まることを実感しています。畑では年中、それこそ100もの仕事があるので、誰にでも必ず得意なことがあり、作業を通して役割や自信ができて、認知症は治らなくとも自我が補強され、生きていく上での幸福度を高めることができるのです。

また、ADHD や自閉スペクトラム症などがあり、はみ出してしまいう子どもたちも、畑作業を通じて、できることがあり、自信をもち、褒められるというプラスのスパイラルを体験することができますし、第3の居場所があることで落ち着き、お友達と仲直りしたりもできま



す。こういったことは、ランドスケープ分野の人間がもっと積極的に取り組んでいかなければならないと思います。

園芸療法士が事前に植栽グリッドを作っておいた畑で3歳児が正確に苗を定植し、秩序を理解していく
(写真提供：浅野房世さん)

秋田：例えば災害の避難所では、力仕事ができる人だけでなく、食事を作ることができる人、子どもの世話ができる人など、色々な人が必要で、力仕事ができる人だけではコミュニティが維持できないし、避難生活も成り立ちません。細々した仕事も沢山あります。このように、全ての人に担える役割があり、それをいかに活かすかということが、ダイバーシティの基本となる考え方であると感じています。

また、復興の取り組みとして石巻市の半島部で住民の方たちと協働でガーデンを作っていますが、そこで異なる場所で被災した方が、自分たちの辛かった経験を語りながら作業をして、癒されていく姿を見てきました。地元の高齢の方も通ってくださっています。対価を支払ったりしなくても、そこにいることができる場所、安心できる自分の居場所、第3の居場所が必要だということを非常に強く感じています。

白波瀬：第3の居場所、さまざまな形の逃げ場を作るということはとても重要だと思います。

日本は、家族単位を基礎としてさまざまな制度がつくられているわけですが、家族を超えて一人一人に向き合おうとすると、多様な前提が通用しないことも少なくありません。例えば虐待の連鎖をどうサポートしていくか、というような課題は、様々な立場から、検討を積み重ねていくことで、状況が変わっていくと思います。

浅野：鬱の症状が重い方は、暗いところには行けず、屋内でもカーテンを閉め切って過ごすのですが、回復するにつれて、だんだん明るいところに出ていけるようになります。園芸療法では、プランタで植物を育てて、ちょっと元気になったら外に出て地面に植え替えて、もっと元気になったらご近所さんにおすそ分けしよう、という風に、その人の自我を補強し、そっと背中を支えてあげるような取り組みを日々積み重ねていきます。

ランドスケープアーキテクトには、光のあたる場所ばかりではなく、影のところも大切にしなければならないことをきちんと理解してほしいですし、それが多様性に繋がるのではないのでしょうか。

白波瀬：公園デビューという言葉もありますが、外に出て、友達と会って、気が晴れる、という面はありますが、面倒なこともある。これも光と影だと思います。

そもそも外に出られない人もいるので、そういう人が外出できるようになったらよいわけだし、家から公園に行きやすいアクセスが、ハード面でもソフト面でも必要ですね。

光と影がグラデーションのように繋がっていくようなイメージでしょうか。

参画を促すまちづくり

横張:今の、光と影がグラデーションのもとに繋がるというご指摘は、まちづくりにも大きなヒントになると思いました。

例えば、丸の内は、完全なビジネス街で、夜になると誰もいなくなる。でも北隣には神田の街が広がっていて、その間に流れている日本橋川がある種の結界になって、両者がバシッと分かれてしまっている。

このような都市のあり方は、白か黒か、光か影かという二元論的な世界になってしまっていて、様々な問題を引き起こしかねない。そこにグラデーションを持ち込んで、空間的・社会的に連続性を持たせ、結果的に多様性が生むことが、今まさに、まちづくりに求められているのではないかと思います。

白波瀬:私も、グラデーションは、色々な可能性を持っていると思います。と同時に、どちらが原因でどちらが結果か、という話になりますが、グラデーションがあるから多様なのだ、というわけにはいかないのではないのでしょうか。グラデーションをどう積極的にデザインするのかが問われていると思いますし、そのためには多様な人の参画がなければ現実がみえてこないという側面もあると思います。

社会はどうしても同一性が高まる方向に動こうという傾向にあり、自ら意識的に行動しないと内向きになってしまう、ということをきちんと認識する必要があります。ですから、まちづくりには、積極的な関与を促し、多様な人が、多層的かつ複層的に入れるようなデザインが求められると思います。

横張:その通りですね。パッシブに実現できるものではなく、アクティブに働きかけねばならないと思います。

白波瀬:参画という点について、ジェンダーの視点からお話をさせていただくと、人口のおよそ半分が女性ですが、これまでその大部分は意思決定に関わってこなかった。これまで意思決定に関わっていない人たちが関わることで、物事が 180 度良い方向に転換するというわけではないですが、少なくとも今まで通りではなくなります。ですから、まちづくりにおいても、多様な人が関わることで変革を起こすという、積極的参画が今求められていると思います。そのためには、普通の人でも参画できるようなトレーニングも必要ですし、来ていいんだよ、面白いよ、という最初のメッセージを発して、誘ってあげなければならないと思います。

秋田:そうですね。私も、背中を押すというか、力を引っ張り出すこと、エンパワーメント

が、未来のために非常に重要だと思います。

浅野：私もそう思います。白波瀬先生がおっしゃったように、自然発生を待つのではなく、思わず関わりたくなるような巧みな仕掛けをもつハードを戦略的に作り、参画を誘発することによって、色々な意見が集まり、文化が生まれて、それがスパイラルになって、躍動する都市ができていく、第3のコミュニティが生まれていくという感じになればとても素敵だろうなと思います。



コミュニティガーデンとしての予防園芸療法
(写真提供：浅野房世さん)

横張：アフォーダンスにもとづく仕掛けが都市の中に埋め込まれているということですね。最後に、読者に向けてメッセージをお願いします。

浅野：私はこれからも、人間には絶対に緑が必要だと思っています。緑が、グラデーションのように、都市の中から、田園へ、そして本来の自然まで繋がっていったらいいなと思っています。

白波瀬：私は子どもたち、未来の世代のことを慮ることが大切だと思っています、彼らが次の世界を作る当事者になります。そこに、我々が禍根を残して足を引っ張ることはあってはならない、と強く思います。人類には英知がありますから、そのところは信じて、次の世代

に期待をかけて、とにかくやってみてほしい、と思っています。

横張：その土地の地形、植生、文化などを読み解き、積極的な参画を促しながら、英知をもってまちづくりに取り組んでいく姿勢が求められているということですね。

本日はありがとうございました。

(終了)